29P-am10

中枢神経抑制薬の併用によりプレガバリンの副作用発現率は上昇する

○大石　晃弘[1,2], 地嵜　悠吾[1,2], 阪中　美紀[2], 須藤　正朝[2], 森井　博朗[2], 平　大樹[2], 森田　真也[2], 長澤　一樹[1], 寺田　智祐[2]（[1]京都薬大, [2]滋賀医大病院薬）

【背景・目的】プレガバリン（PGB）は末梢神経障害性疼痛に適応を持ち、多くの診療科で使用されている。しかし、PGB の副作用である傾眠、浮動性めまいが高齢者で多くみられ、転倒や交通事故の事例も報告されていることから、PMDA が 2012 年 7 月に注意喚起を行った。PGB の投与量は腎機能に基づいて規定されているが、実地臨床において傾眠・浮動性めまい発現の影響因子を解析した例は乏しい。そこで本研究では、これらの副作用発現のリスク因子を同定するためにレトロスペクティブに調査を行った。

【方法】2010 年 9 月～2012 年 9 月の間に滋賀医科大学医学部附属病院において入院中に PGB を処方された患者を対象とし、電子カルテを基に血液検査値、PGB 投与量、傾眠・浮動性めまいの有無等について調査した。

【結果】PGB 服用患者 195 名のうち、傾眠・浮動性めまいのいずれかが発現した患者は 63 名であった（傾眠: 47 名、めまい: 34 名）。患者背景因子の解析の結果、PGB の副作用発現への年齢や腎機能の関与は認められなかった。一方、中枢神経抑制薬の併用が有意な因子として見出された。規定用量超過患者群と規定用量内患者群の間には、副作用発現率に有意な差は認められなかった（超過群:37.9%、規定内群:31.3%）。

【考察】今回の解析では、これまで PMDA が注意喚起を行っていた年齢については、有意なリスク因子としては認められなかった。一方、実地臨床では PGB は多くの薬剤と併用されており、オピオイド鎮痛薬などの中枢神経抑制薬との併用により副作用発現が有意に増加していた。この結果から PGB 使用の際には年齢と共に、中枢神経抑制薬との併用についても、より注意するべきであると考えられる。